

# 慧琳「一切経音義」データベース

住谷芳幸

文化創造学部文化創造学科

(2008年11月5日受理)

## The Hui-Lin-Yin-Yi Database

Faculty of Cultural Development, Department of Cultural Development,  
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

SUMIYA Yoshiyuki

(Received November 5, 2008)

### 1 はじめに

日本漢字音の漢音は、中国唐代中期の長安方言音である「秦音」を母胎として成立したと考えられている。この「秦音」については、慧琳撰述の「一切経音義」（以下「慧琳音義」とする）の音注により、その体系を知ることが出来る。この「慧琳音義」の反切については、黄淬伯が『慧琳一切経音義反切攷』（注1）中で整理・分析し、音韻表を作成している。しかし、この『慧琳一切経音義反切攷』では、反切の所在を明示してはいない。その不備を補うためもあり、次の二種の反切索引が新たに作成されている。その一つが神尾式春『慧琳一切経音義反切索引』（注2）であり、もう一つが上田正『慧琳反切總覽』（注3）である。それぞれに特徴はあるものの、反切から推定される音を中国中古音の韻類に従い分類し、さらに声類に細分して表示し、所在の巻数・丁数を示す点は同一である。これらの二つの索引については、共に労作であることは疑いのないものの、検索の便が向上したかどうかについては、疑問が残る。さらに問題となる点は、上田正が「慧琳音論考」

（注4）中で神尾式春『慧琳一切経音義反切索引』の「欠陥」を指摘しつつ、新たに『慧琳反切總覽』を作成したことにある。『慧琳一切経音義反切索引』の欠陥を訂正するために、新たに『慧琳反切總覽』を初めから作成したからである。このことは上田正が、『慧琳一切経音義反切索引』を細かく確認・訂正するより、新たに作成し直すほうが容易だと判断したことを示している。この点は『慧琳反切總覽』についても同様であり、『慧琳反切總覽』を細かく確認・訂正するより、新たに作成し直すほうがはるかに容易であろうと思われる。このような形式で作成された索引を確認・訂正する作業には、かなりの困難さが伴うからである。それは、索引それ自体が、その索引のもととなった《もの》そのままではなく、なんらかの基準で配列し直されたからである。もとの《もの》の順に配列されていないため、確認・訂正する作業は、かなり困難となる。もちろん、もととなった《もの》そのままではなく、なんらかの基準で配列し直されたからこそ、検索に役立つのではあるが。

以上の点を考慮し、新たにコンピュータで

利用可能な「慧琳音義」の反切データを作成することとした。このデータ中に、「慧琳音義」中の反切帰字・反切上字・反切下字が含まれるのは当然であろう。さらに、次の二点も目的とした。第一点は、前記二索引と同様に、その反切により示される音の韻類・声類を中国中古音の体系に従い示すことである。もう一点は、反切の所在を前記二索引より細かく表示することで、「慧琳音義」での出現順に並べ替えることもできるようにすることである。反切データを「慧琳音義」での出現順に並べ替えることで、その確認・訂正を容易にするためである。以下では、以上のような目的で作成された「慧琳音義」の反切データについて説明する。

## 2 慧琳「一切経音義」データベース

「慧琳音義」の反切データ（以下「慧琳音義データベース」とする）は、BTRON仕様のコンピュータ用オペレーティングシステムである「超漢字」に付属するカード型データベース「マイクロカード」を用いて作成した。「慧琳音義データベース」は次の様に設計されている。

項目名	: データの種類
漢字	: 文字
反切	: 文字
反切上字	: 文字
反切下字	: 文字
韻類	: 文字
声類	: 文字
等位	: 数値
巻数	: 数値
丁数	: 数値
表裏	: 数値
行数	: 数値

行内番号	: 数値
右左	: 数値
備考	: 文字
備考(本文)	: 文字
備考(文字)	: 文字
備考(その他)	: 文字
連番	: 数値

### 2.1 漢字

「漢字」の項目は、「慧琳音義」に掲出され、反切を付された漢字を示した。「慧琳音義」において、漢字は2字以上の熟語として掲出される場合も多い。しかし、「慧琳音義データベース」での「漢字」の項目では、反切に対応する漢字1字を示した。また、この項目ではTRONコードの8面・9面の大漢和辞典収録文字（諸橋轍次『大漢和辞典』に収録された文字）を用いた。もちろん、「慧琳音義」中の漢字の字形については、8面・9面の大漢和辞典収録文字では不十分な場合も多い。しかし、漢字の確認・検索の便を勘案し、8面・9面の大漢和辞典収録文字を用いた。また、「慧琳音義」に掲出された漢字には、多彩な異体字が用いられている。そこで、異体字の整理のために、『大漢和辞典』を参考に、「慧琳音義」で用いられた漢字とは異なった字形の漢字を使用した場合もある。なお、「慧琳音義」としては、『高麗大蔵経』（注5）所収のものを用いた。

### 2.2 反切

「反切」の項目は、上記の「漢字」の項目に付された反切を上字・下字ともに示した。この「反切」の項目もTRONコードの8面・9面の大漢和辞典収録文字を用いた。

### 2.3 反切上字・反切下字

「反切上字」・「反切下字」の二項目は、上

記「反切」の項目を、それぞれ上字・下字として分離して示した。そのため、基本的には「反切」の項目と「反切上字」・「反切下字」の項目とは同一のものとなる。ただし、「慧琳音義」掲出の漢字と同様に、反切の用字でも多彩な異体字が用いられている。そのため、反切に用いられた漢字でも、「慧琳音義」掲出の漢字と同様に、異体字の整理のため、『大漢和辞典』を参考に改めた場合がある。その際、この「反切上字」・「反切下字」の項目には改めた漢字を示し、「反切」の項目にはもとの漢字を残した。この「反切上字」・「反切下字」の二項目も TRON コードの 8 面・9 面の大漢和辞典収録文字を用いた。

#### 2.4 韻類・声類・等位

「韻類」「声類」「等位」の三項目は、上田正『慧琳反切總覽』を参考に、各反切から推定される音の韻類・声類・等位を示した。また、等位については、数値として扱い、それぞれ一等を 1、二等を 2、三等を 3、四等を 4 とした。なお、『慧琳反切總覽』では、三等を A・B・C・D 類に四分するが、ここでは単に三等のみとした。韻類・声類・等位は中国中古音の体系に従ったものであり、あくまで参考として示したものである。この「韻類」「声類」の二項目も TRON コードの 8 面・9 面の大漢和辞典収録文字を用いた。

#### 2.5 卷数

「卷数」の項目は、「慧琳音義」での卷数を数値で示した（1 から 100 まで）。

#### 2.6 丁数

「丁数」の項目は、「慧琳音義」での丁数を数値で示した（1 から最大は第五二巻の 60 まで）。

#### 2.7 表裏

「表裏」の項目は、「慧琳音義」の各丁での表裏を、表を 1、裏を 2 とし、数値で示した。

#### 2.8 行数

「行数」の項目は、「慧琳音義」の各丁での行数を数値で示した。この「行数」の項目での数値は、基本的には 1 から 6 までの整数である。ただし、双行割注の扱いに乱れがあり、割注一行分を最初の行とみなした所が数箇所ある。そのため、その箇所では最初の行の数値を 0.5 とし、次の行を 1 とした。

#### 2.9 行内番号

「行内番号」の項目は、各行での漢字の掲出順を数値で示した（0.1 から最大は第八二巻六丁表一四行の 14 まで）。この「行内番号」は、「慧琳音義」で各行に掲出された全ての漢字に対し、順に数値を対応させたものであり、音注が付されていない漢字については、空番となっている。また、漢字二字以上の熟語等の漢字でも、行を跨いで掲出された場合は、その漢字が行頭に掲出されていれば 1 とした。

「慧琳音義」では、割注に含まれる漢字に対しても、反切・直音注を付して、その音を示す場合がある。この場合は、割注直前の漢字の「行内番号」に小数点を付し、例えば 2.1、2.2 のように順に数値を対応させて示した。また、割注が行頭にある場合には、0.1、0.2 のように扱った。ただし、「慧琳音義データベース」には、直音による音注は含まれないため、小数点以下の数値にも空番がある。

#### 2.10 右左

「右左」の項目は、割注に含まれる漢字の右左の掲出位置を数値で示した。上記「行内番号」の説明で、割注に含まれる漢字の音注

に対しても、小数点以下の数値で「行内番号」を付したことを述べた。しかし、この「行内番号」だけでは、右左双行のどちらの行に含まれるかが明確ではない。そのため、この「右左」の項目で、右左の位置を数値として示すこととした。割注中がない場合、すなわち「行内番号」に小数点以下の数値を含まない項目では、この「右左」の項目の数値を0とした。割注中の場合、すなわち「行内番号」に小数点以下の数値を含む項目では、右行に漢字が掲出されていれば、この「右左」の項目の数値を1とし、左行に掲出されていれば、この「右左」の項目の数値を2とした。これらの数値はあくまで漢字の掲出位置に対して付したものであり、反切の掲出位置に対してではない。

## 2.11 備考・備考(本文)・備考(文字)・備考(その他)

「備考」「備考(本文)」「備考(文字)」「備考(その他)」の四項目は、もともと個人用に雑多な覚え書きとして記入していたものを、見やすさを考慮して分離したものである。個人的な備忘であるため、削除することも考えたが、何かの役立つ事もあるかと考え残した。なお、「備考(本文)」の項目は「慧琳音義」からの引用、「備考(文字)」では『大漢和辞典』を参考に「漢字」の項目の字形を改めた際の、もとの漢字の表示が中心である。ただし、雑多な項目を手作業で分離したものであり、思いがけない誤りが含まれているかもしれない。

## 2.12 連番

「連番」の項目は「慧琳音義」中の反切・直音による音注の掲出順を、割注に含まれる音注も含めて、連続した数値として示した(1からまで36514まで)。ただし、この「慧琳音

義データベース」では、直音による音注は含まれないため、空番となるものがある。なお、「慧琳音義データベース」全体としては、29791レコードである。この「慧琳音義データベース」を「慧琳音義」での掲出順に並べ替えるだけであるならば、「丁数」「表裏」「行数」「行内番号」「右左」の項目によって並べ替えれば可能であり、特にこの項目は必要ではない。ただし、これら「丁数」「表裏」「行数」「行内番号」「右左」の項目は、手作業で入力したもので、思いがけない誤りがあるかもしれない。「連番」の項目は、入力した順に自動的に連続した数値を与えたため、この「連番」によって並べ替えることで、入力順に並べ替えることが可能となる。また、今後、直音により注記された漢字についてもデータベースとして整理する予定であり、これら2つのデータベースを統合する際には役に立つであろう。

## 3 補足

ここでは、上記では述べることの出来なかったことを、補足として追加する。

### 3.1 漢字字体の変更

上記2.1の「漢字」の項目について説明した際に、「『大漢和辞典』を参考に、「慧琳音義」で用いられた漢字とは異なった字形の漢字を使用した場合もある」ことを述べた。漢字そのものが多彩な異体字の集合であることは周知の事であり、『大漢和辞典』約50000字の内、17032字が異体字として収録されているとの報告(注6)もある。この異体字の多彩さは、このような大規模な漢字データベースを作成する際の問題となる。異体字については、例えばJIS第一水準・第二水準の6355字の範囲内に限れば、亜・亞など数多く思い浮べることができる。ところが、『大漢和辞

典』約50000字の範囲となると、数度同様な漢字データベースを作成したことがあるにもかかわらず、相変わらず『大漢和辞典』で確認しなければならない。さらに、亜、亞のようにその字形から異体字であることが、ある程度想定可能なものばかりではなく、字形のうえでは全く似ていない漢字が、異体字である場合も少なくない。「慧琳音義データベース」のような大規模な漢字データベース作成することの目的の一つは、従来の書物の形式で作成された索引を用いて検索する際の不便さを解消することであろう。しかし、データベースで使用する漢字の範囲を『大漢和辞典』約50000字まで拡大すると、データベース中に必要とする漢字が見出されない場合であっても、『大漢和辞典』等を参照して異体字の確認をし、その異体字で検索するという作業が必要となる。このような煩雑な作業を強いることは、コンピュータ用データベースの作成の目的に反する。さらに、同じ漢字が異なった異体字として複数登録されていると、データの整理・分析する際の問題となることも考えられる。

以上のような異体字の問題を処理するために、「慧琳音義データベース」では『大漢和辞典』の記載により、異体字の整理を行った。もちろん、『大漢和辞典』に、異体字あるいは正字などという記載があるわけではない。しかし、『大漢和辞典』では、反切または音注がなく、また語釈もなく、「～に同じ」「～の俗字」として収録された漢字が、数多く含まれる。これらの漢字を異体字として扱い、「～に同じ」などとされたもとの漢字に改めた。もちろん、「～に同じ」などとするのは、あくまで『大漢和辞典』での解釈であり、異なった解釈も可能であろう。さらに、「慧琳音義」中において、『大漢和辞典』の解釈と同様に異体字を扱っているかどうかは明確で

ない。しかし、多彩な異体字と考えられる漢字をそのまま検索・分析するよりは、効果的ではないかと考え、このような整理を行った。変更する以前の漢字については、「備考（文字）」の項目で確認できるようになっており、それらを参照すれば異なった分析が可能となるかもしれない。ただし、「慧琳音義データベース」で扱った漢字は、基本的に『大漢和辞典』約50000字の字形としてであり、それ以上の細かな字形の違いについては対応していない。

また、この異体字の整理については「反切上字」「反切下字」の二項目でも同様である。

### 3.2 玄応「一切経音義」の反切について

上田正『慧琳反切總覽』では、他の音義から「慧琳音義」に引用された反切について、「第21～23・25～26・27巻の慧苑・雲公・基師の原撰の経は除く。玄應原撰の経については玄應音義諸本と對校して慧琳の改定と判定した反切のみに止めた。」とする。「慧琳音義データベース」でもこれにならった。その際、『古辞書音義集成』中の『一切経音義（上）（中）（下）』及び『一切経音義索引』（注7）を参照した。ただし、慧琳の改定かどうかの判定は必ずしも容易ではない。例えば、玄応「一切経音義」（以下「玄応音義」とする）各本に用字の違いがあり、さらにそれらが慧琳の用字とも異なっていた場合、「玄応音義」の問題なのか、慧琳の改定なのかの判定は微妙なものとなろう。さらに、慧琳は「慧琳音義」の作成の際に、特定の「玄応音義」を用いたものと考えられるため、「玄應音義諸本と對校」すること自体、はたして有効な方法かどうかには疑問が残る。

また、「玄応の反切」に対して大量に反切用字を変えたがその読みを変えることはしなかった。新たに導入した反切用字は玄応の元

用字に比べると、三分の二以上は中古韻書と韻図の音系に沿った開口合口、四等など音韻特徴に一致するよう改良したものであった。」

(注8)との報告もある。慧琳の改変を単に用字の変更と解釈できるならば、その音を慧琳の音と認定してよいかどうかは問題であろう。ただし、ここでは単なる用字の変更を「三分の二以上」とするが、残りの三分の一以下の変更は何のためかの説明がなされなければ、単なる用字の変更とする結論も十分な説得力を持たないであろう。

以上、様々な問題があるものの「玄応音義」と異なった反切と判断できるものは全て採録した。ただし、この部分については、さらに検討すべきと考えている。

### 3.3 梵語の音について

梵語の音(胡語の音も含む。以下同じ。)等の注記に用いられている漢字について、上田正『慧琳反切總覽』では、「梵語・胡語の音の譯音、固有名詞等で通常の音とは考えられないものは除く。」とする。「慧琳音義」では、梵語の音訳あるいは陀羅尼等に用いられた漢字については、「梵音」(「胡音」も含む。以下同じ。)と明示している。そして、『慧琳反切總覽』には、確認できた範囲では「慧琳音義」で「梵音」と表示された漢字およびその反切は採録されていない。これら梵語の音を示すために用いられた漢字には、当時のあるいは翻訳時の中国語音とは異なる音を示すことを目的としたものも含まれるであろう。しかし、「梵音」と表示された漢字の全てがそのような目的の漢字とは、到底考えられないようである。「梵音」として示された漢字

に付された反切には、一般の漢字に付された反切と同じ音を示していると思われるものも多く見出されるからである。梵語の漢訳とは、基本的には梵語を中国語音で示すことが、その目的のように思われる。もちろん、時には中国語音にはない音を表さなければならない場合もあったであろう。そのため、梵語の音を注記した漢字および反切については、どれが中国語音であり、どれが中国語音以外であるかを明確にする必要がある。そこで、「慧琳音義データベース」では、『慧琳反切總覽』では採録していない「梵音」と表示された漢字とその反切も採録した。ただし、「備考」の項目に「梵音」と表示し、「梵音」であることを明示した。

### 4 おわりに

以上、「慧琳音義データベース」について簡単に説明してきた。このデータについてはインターネット上での公開を予定している(<http://www.gijodai.ac.jp/user/sumiya/data.htm>)。

- 注1 中央研究院歴史語言研究所專刊之六、1931年  
 注2 私家版、1976年  
 注3 汲古書院、1987年  
 注4 『日本中国学会報』35号、1983年  
 注5 東國大學校、1976年  
 注6 『大漢和辞典』を読む会「『大漢和辞典』に異体字はいくつあるか?」、『しにか』第12巻第6号、2001年  
 注7 汲古書院、1980~1984年  
 注8 丁鋒「慧琳《一切經音義》改良玄應反切考」、『海外事情研究』62、2003年